

# 海外への扉を開こう



2012年12月、南スーダンの首都ジュバで  
土のうによる道路補修を手伝う筆者

転機は20年前。国際協力でケニアの大学で土木工学を教えることになり、心優しいケニア人学生たちと3カ月を過ごした。青い空とそこに浮かぶ雲、緑の木々。赤い大地に魅せられ、毎年教壇に立つようになった。

そのうち、アフリカの人々の暮らしを豊かにし、貧困削減につなげるためには何が必要だろうかと考えるようになつた。湧き上がつてきたのは「雨期になると、どうになつて通れなくな

る道を何とか通れるようになりたい」という思い。私は当時、京都大学工学部土木工学科の学生だったので、人々の暮らしを豊かにするために建設会社に入り、海外で橋や道路などを造るのが夢だった。ところが、尊敬する教授に「大学に残つて研究を続けては」と勧められ、研究者の道を選んだ。研究の合間に海外にも自由に行って、留学もできるとを考えたからだ。

## 限りない可能性を信じて

若者は無限の可能性を持っている。少しくらい失敗しても、方向を修正し、夢に向かつて突き進めばよい。やりたいことや興味のあることは、年齢を重ねるに従つて変化する。ただし、私の頭の中の変わらぬものは「海外」という言葉だった。19歳の夏、1人でカナダ横断の自転車旅行に出掛けた。初めての海外旅行は、テントと寝袋と簡単な調理器具を積んで、暮らすことを夢見た。

20歳になると、次はどの国を自転車で走るばかりを考え、アルバイトに明け暮れた。24歳の時にサハラ砂漠を縦断した。「どんなものでも食べられ、誰とでもしゃべれて、どこでも寝られる」にはサハラ砂漠を縦断し走つた。一種の「海外にモットー」として、4万キロをモットーとし、4万キロ

した。

自分たちの使う道を自分たちで直せたことで、住民の笑顔が広がつた。

笑顔と共に日本語の「donou」が現地の人々に定着していくのがうれしくて、今は「途上国の発展をお手伝いしたい病」で海外に通つている。

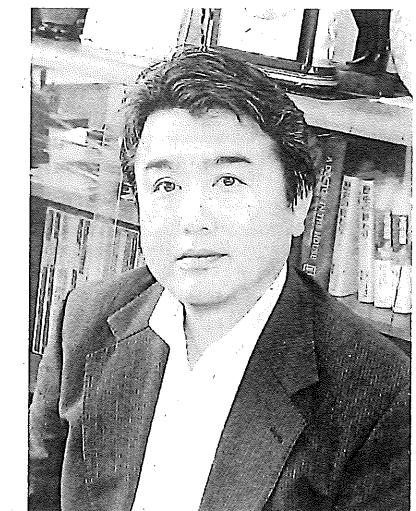
自分たちの使う道を自分たちで直せたことで、住民の笑顔が広がつた。自分で世界への扉を開いて、いろんな人と出会つてみよう。きっと、それまでとは全く違う自分が見えてくるはずだから。

新成人の皆さん、まずは海外に行ってみませんか。自分で世界への扉を開いて、いろんな人と出会つてみよう。きっと、それまでとは全く違う自分が見えてくるはずだから。

木村亮

成人の日に寄せて

13日は「成人の日」。学生時代、各地を旅し、自らの可能性を探った京都大大学院の木村亮教授にメッセージを寄せてもらつた。



きむら・まこと 1960年、京都市出身。85年京都大学院工学研究科土木工学専攻修了。2010年より現職。07年にNPO法人「道普請人」を設立し、途上国で「土のう」による道路補修活動を開始。補修した道路はモザンビーク、南スーダンなど15カ国に及ぶ。